高津区おはなしアーカイブ

●樋口　智亮（ひぐち　ちりょう）さん

昭和１９年生まれ　７３歳
川崎市高津区久本在住

◆ご家族のこと

私はこの家で生まれたんですよ。当時のことだからお産婆さんが家に来てくれて、今でいう自宅出産ですね。兄妹は５人でした。長女、次女、長男、次男、そして私が三男で末っ子でした。

父は福井県の農家の出身なんです。母の出身は東京都の四谷です。父の兄が上野の寛永寺で修行しておりまして、父はその兄を頼って１２歳で上京したというわけです。

◆龍台寺について

今、私が住職をしているこの寺（龍台寺）は、実は無住の寺だったんですよ。檀家の方たちが「誰か寺に入る者はいないか」と探しておられて、寛永寺にいた父に声がかかったという訳です。縁者の方が紹介してくださいまして、大正１２年に父はこの寺に入ることになったんです。

私は三男で、長男・次男は健在なんですが、どういう訳だか今は私が寺を継いでおります。

私がこの世界に入ったのは遅かったんですよ。東京の大学を出て、しばらくは勤めにでていましたからね。

昭和４５年にそれまでの茅葺の家から今の建物に建て変えられました。もう茅が手に入らなくなりましたし、職人さんもいなくなってきてましたからね。私、一度だけだったけど屋根を葺くのを手伝ったこともあるんですよ。梁に上って屋根の中に入ってね、まっ黒になって何十本も茅を束ね紐の針を戻す作業をしました。

住職を継いだのは３７年前、父（住職）の他界後です。すでに２６歳ごろから父を手伝ってはおりましたがね。

◆小・中学生の頃

私は幼稚園には行きませんでした。その当時、幼稚園に行く人は少なかったですよ。当時は色々と困っている人と一緒に住んだりしていました。２世帯の方に部屋を貸したり、数人の学生も同時に下宿している時もありました。その中に１歳年上の友達がいて、いつもその子と遊んでいましたね。お祭りが楽しみでね。当時は写真なんてあ

まり撮らなかったんですけれど、一緒にお祭りの法被を着て写った写真がありました。

小学校は高津小学校です。近所の友達と一緒に通いました。遠かったですよ。２キロ弱あったと思います。私は小柄だったので、低学年の時は４０分ほどかかりましたね。

学校への通学は、粗末な洋服にズック靴でした。畑作業を手伝う時もしばしばあり、父はゲートルを巻いて地下足袋でした。中でも忘れられないのは山上の畑へ急な坂道を上って下肥えを何度も運んだことです。

１年生の時は給食はなかったですね。２年生からだったかな。でも、コッペパンと脱脂粉乳だけ、その程度でした。家からおかずを持参したりはしていません。級友が休んだ時は、パンをわら半紙でくるんで届けたりしましたね。

学年が上がるにつれ、揚げパンなど、多少違うものもいただきました。楽しみでしたね。

当時は、地域の子どもがどんどん増えて、私が１年生の時に東高津小学校ができました。私が６年生の時には１クラスは約６０人で８クラスありました。また、その頃、さらに久本小学校が地元にできました。

６年生のとき、新聞配達をやっている友達がいました。家計を助けていたんですね。家が学校に近い子で、配達が終わった７時ごろに私の家に来て「おーい、起きろ！」って大声で呼びかけられたりしました。(笑)

中学校は高津中学校です。６０人で１２クラスありました。下野毛や宇奈根など学区は広範囲で、今でいうマンモス校でした。おかげで友人が多く持てました。中１の時に西高津中学校が新設されて分かれました。

中学校のときは部活動で卓球をやっていました。田中や荻村という選手が活躍していて憧れたものです。当時世界を制覇していた「卓球日本」の選手は、殆どがペンホルダー（シェークハンドではありません）でした。

高津小学校の仲間は、卒業すると大山街道以西の友人は西高津中学の１期生になりました。ほかの生徒は高津中学校で東高津小学校卒業生と合流しました。

◆中学校卒業後

高津中学卒業後は東京の仏教の学校へ行きました。まだ寺を継ぐ決心はしていませんでしたがね。駒沢大学と関連のあった世田谷高校といって、禅宗の学校でしたので、毎週座禅などの授業もありました。通学は溝口から二子玉川園へ行って、そこから玉川電車という路面電車に乗って三宿という駅まで通いました。東京オリンピックを数年後に控え、徐々に車が増えていったので所要時間はバラバラでした。

大学もやはり仏教系のところに行きました。私は旅行が好きなんですが、大学１年の時に汽車に乗って山口県の友達の家を訪ね、泊めてもらったのが初めての旅行でし

た。２泊でしたが、厚かましかったなと思っています。

卒業後は数年間旅行関係の仕事をしておりました。

◆子どもの頃の遊び

小学校は遠かったですから、帰り道も遊び場でしたよ。車やオート三輪自動車など乗り物を早く見つけたら勝ちだとか、四つ足（動物）を見つけたら勝ちだとかのルールを決めて、勝った子のランドセルを負けた子に持たせるなどという遊びをしながら帰宅しました。

その他にも、用水に笹船を浮かべたり、草笛を作って吹いたり、いくらでも遊ぶことがありましたね。

帰宅後は自分の家（寺）の庭が格好の遊び場でした。皆が集まって、ベーゴマ、メンコ、馬跳びや石蹴り、裏山に入って冒険したりなど。

そりゃもうケガもいっぱいしました（笑）。切り傷するなど日常茶飯事、手はあかぎれ、当たり前でしたね。

おやつなんていただいたことはないですよ。たまにふかし芋などはいただきましたがね。焚火をするころにはサツマイモを焼くのが楽しみでした。黒焦げになったりしてね、そういうことも楽しかった。

そうそう、焚火に埋めて暖めた小石をカイロ代わりにしたり、寒い日に水分が凍って棒のようになったタオルでも遊んでいましたね。長い太い氷柱も頻繁にできていました。

それから近所に来ていた紙芝居も楽しみでした。水あめなどを買うと、それが見物料になるんです。「月光仮面」「鞍馬天狗」とか、そういう話だったかな。やって来るのはいつも同じおじさんでしたね。

あと、雪が降るとね、降り始めてから竹を取りに行って、ミカン箱にくっつけてソリを作って滑りました。竹は裏山にいくらでもありましたからね。

竹馬も作りましたよ。遊び道具はほとんど自分で作ってました。竹とんぼ、水鉄砲だの紙飛行機だのね。

◆日々の暮らし

朝起きたら、井戸の水くみ、雑巾がけ、それから火を起こしたりといった仕事を兄妹皆で手分けしてやっていました。

現在も庭で活躍している井戸

昭和４５年までは井戸水を使って暮らしていたんです。今でも庭掃除や水やりには使っています。

お風呂にはバケツで２０～３０杯をくみあげなくちゃいけませんでした。薪割りして焚き木も作らなくちゃいけないし、焚き付け方にもコツがあるんですよ。

その頃はお風呂が自宅にない家も多かったですね。よそに借りに行ったり、ドラム缶で代用したりしてたかな。

オリンピック（昭和３９年）の頃からモーターで井戸水を汲むようになり、おかげでそれから５年間ほど楽をしました。

そして昭和４５年から水道が使えるようになりました。ただ、ここは高台なんですが、下の方までは本管がきていたんです。近所の友達の家ではずっと前から水道を使っていたという話を聞いてびっくりしましたね(笑)。２５年間も知らなかったんです。

料理は土間で、へっついに火を起こして煮炊きしていました。米は外米がほとんどで、パラパラ、ポソポソしていて少し匂うんですよね。

食事をするときは卓袱台をだして、おかずは、みそ汁、おしんこ、糠漬け、ぐらいでしたかね。何十年来のぬか床があったんですがね、今はもう漬けていません。

◆町の移り変わり

大正の終わり頃まで、多摩川には橋がなくて東京方面に行くときは渡し舟を利用していたそうです。その後二子橋ができ、昭和初期に渋谷―玉川間を走っていた玉川電気鉄道が溝の口まで開通しました。南武線も開通し、その頃から少しずつ町が賑わい始めたのではないでしょうか。

戦後の話ですが、神社の近くには久本商店街があり、乾物屋や佃煮屋、魚屋や肉屋などがあり、一通り揃いました。魚屋や肉屋は昭和４０年代後半までは残っていましたね。肉を買うときなど、重さの単位は匁（もんめ）が使われていました。

駅の近くに「カマボコ図書館」と呼ぶ図書館がありました。現在の高津図書館ですね。元兵舎を利用したもので、冬は寒く夏は暑かったですね（笑)。本はそれほど多くはなかったですが、「トムソーヤの冒険」や「野口英世」などの伝記物などを夢中で読みました。

そのあたりで５円玉を拾ったことがあって、カマボコ図書館の隣の交番に届けたら「飴玉でも買いなさい」と言われ、ものすごく嬉しかったことをよく覚えています（笑)。

昭和２５年以降、色々な店が駅前にできていき、２階建ての溝口百貨店ができたときは盛大に開店祝いが催されたのを覚えています。

久本神社や下作神社のお祭りの日は学校も早く帰らせてくれましてね、あちこちのお祭りに行けたもんです。

お祭りでの一番の思い出は、宵宮ですね。

仮設舞台があって、各地で興行して回る旅芸人が芝居を見せてくれました。見世物小屋なんかもあって賑やかでしたよ。お祭りは何よりの楽しみで、友達と揃いの法被を着て走り回って遊んでいました。

今はどの神社も同じ日にお祭りを開くようになりましたねえ。複数の祭りに行けなくなりました。

その昔、久本という地区はかつて久本村と呼ばれていて、住んでいたのは４０軒位でした。ほとんどが農業を営み、周辺は田圃ばかりでした。

それが戦前に国に買い上げられて広大な軍需工場になり、戦後には他の工場になったり、学校になったりと変わっていったわけです。溝の口駅が終点だった東急田園都市線が延長されてからは、人口も大幅に増えました。

この寺の辺りは、武蔵野の面影を残していた久本・末長の山にマンションをはじめ、たくさんの住宅が建ち、溝口地域全体としては新しい人たちが増えて大きく変わりました。活気ある、元気な、便利な町に大変身しましたね。

（平成２９年１０月２６日取材）